

の伝記」のテキストの復原に払われたダムディンスルン氏らの努力のとうとを感ずるにあらざらば、ならに一段と価値多く感ぜられるのは、失われゆく記憶の保存のために、多くの古老から精力的に聞き取り調査を行ったことと、こうして生の資料の形のまま世界の学界に提供されたことである。こうした資料を通じて、十九世紀のモンゴル生活の一面が、思いがけなくあざやかな色彩を帯びて目に浮んで来るのに接して、何か歴史学こそさうあらねばならぬという感動をおぼえるのは私だけであらうか。

(Noyan Qutuqtu Rabjai: Saran-u Käkügen-u Namtar.

Ts. Dandinsiten beledkebe. Corpus Scriptorum Mongolorum Institutii Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongoli, Tomus XII. Shinjlekh Ulkhaan Akademii Khevel, Ulaanbatar, 1962.)

(註) Jacques Bacot, La Vie de Marpa le “Traducteur” suivie d'un chapitre de l'Avadana de l'Oiseau Nlaka-niha—extraits et résumés d'après l'édition xylographique tibétaine. Paris, 1937. (Buddhica, Première série: Mémoires—tome VII.) 山口瑞鳳氏の示教に感ずる。

ラビドス著

中世後期のイスラム都市

佐藤次高

(一)

これまでヨーロッパの都市は「自治的共同体」であり、アジアの都市は「官僚的に統治された都市」であると一般に信じられてきた。イスラム都市についても、そこに自治的要素を見出すことは出来ないと主張されてきた。しかし新進気鋭の著者はこうした比較による分析はもはや古い視角であると断じ、イスラム都市にも自治と公共のための自発的集會が存在したと考える。つまり研究は形態としての都市にではなく、生きた過程としての都市に重点を置き、さらに社会学の観点をこれに加えた方法をとうとする。したがって「はしがき」によれば、本書の目的は中世後期のイスラム都市の社会構造と政治過程を研究することであり、それは軍人階級と地方共同体との関係を研究することでもある。「序言」によつてこれを敷衍すれば、考察の範囲は靜態的な社会・経済構造や都市の政治機構に限られるべきではなく、都市の階層、内部集団、それらの公的役割と組織の性格、さらには集団内部の行動を特徴づける力まで分析の対象とされなければ

ならない。つまり個人・クラス・グループが共同体に組み込まれる原理が検討されなければならないのである。イスラム都市研究において、これは新鮮な視角であり、その立論の仕方は非常にユニークであると言えよう。推論の素材はマムルーク朝時代（一二五〇—一五一七年）のダマスカスとアレクサンドリアであり、それに首都カイロの分析が補助的に加えられている。本書を中世後期のイスラム都市論として普遍化する場合には、この素材の選択の仕方が問題になるのであるが、これについては(三)で詳しく述べることにしたい。

(二)

次に本文に即して以上の問題が具体的にどのようなように展開されているかをみることにしよう。便利のためにまず本書の構成を示せば次の通りである。

はしがき、序言

第一章 マムルーク朝時代の都市の歴史

第二章 都市生活とマムルーク体制

第三章 都市社会

第四章 政治組織——マムルーク階級と都市貴族——

第五章 政治組織——民衆の暴力と無気力——

第六章 結論——中世イスラム都市における社会および政治組織——

補遺・文献目録・注・索引

第一章は単にマムルーク朝時代の「都市」の歴史を叙述したというより、むしろマムルーク朝「社会」の歴史を概観した章である。したがってここには著者のマムルーク朝社会あるいは国家に対する評価の仕方が端的に示されていると言つてよい。「序言」にあるように著者はマムルーク軍事体制の拡大をイスラム史の決定的要素であると考える。つまり十世紀に中央アジアから西アジアへトルコ人が侵入したことによつて、古いアラブ・ペルシア的な官僚組織は軍事的土地所有の組織にかわり、また基本的な社会関係の側面から言えば、貴族と民衆の関係は軍人—地方貴族—都市民の関係にかわつたとするのである。このような観点に立つて、第一章ではマムルーク朝時代は五つに時期区分されている。第一はイスラム史の中で始めてエジプト・シリアの長い統一が実現された一二六〇年から一三一七年まで、第二は繁栄と安泰の時代である十四世紀、第三はチムールのシリア攻撃やマムルーク相互の政治権力争いが続く一三八八年から一四二二年まで、第四は社会・経済秩序が回復する一四二二年から一四七〇年まで、そして第五は都市生活の破壊と敗戦によつてマムルーク朝が崩壊する一四七〇年から一五一七年までの時代である。この時期区分それ自体は言わば政治的な区分であるが、その内容は豊富な経済史料を引用して叙述されている点が特徴で

ある。第二の時期を例にとつてみれば、スルタン、ナースィル(在位一二九三—四、一二九八—一三〇八、一三〇九—四〇年)治下の一二三三年から一三三四年にかけて軍隊への俸給支払いと納税者の義務の組織化が行われたことが記され、またシリア各都市の生産物や国内交易ルートが検討されている。

第二章では、まず組織化された都市生活は支配階級であるマムルークに依存していたために、都市に対する権力はイスラム史を通じてマムルーク朝時代が最も強かつたことが述べられる。しかしそのマムルークが人種ばかりでなく、出身・言語・精神あるいは権利の点においても、被支配階級と異なつていたところに問題を複雑にする要因が潜んでいた。そして軍人・従者・公官吏・家族等から成るマムルーク一族は地方政治の中心ではあつても、それは単に国家の一部として存在したのではなく、個人的独立の源泉でもあつたことが重要であるとされる。つまり都市の経済は土地を所有する体制、特に余剰農産物を自由にする権利をもつていたアミールの政策に依存していたのであつた。それによつてアミールは都市内部の財産を処分し、労働力を組織化する権力を有していたのである。公共事業の責任は政府にあつたのではなく、アミールの個人的利益、彼らの義務感、あるいはその支配の合法化への要求に委ねられていた。つまりアミールは地方社会の

保護者・貴族としての性格を持つていたのである。

第三章は都市共同体の内部組織を分析した章である。まず構成員の階層が分析され、四つの階層が指摘されている。第一はマムルークを中心とする支配階級(Barbans)であり、第二は学者・裁判官・説教師等から成る中間層(atab'yan)、第三は一般民衆(al'amna)、そして第四が浮浪人や夜警人から成るルンペン・プロレタリアートである。次に都市の居住地区(小共同体)にはじめて光をあてた、街区(Sayb)の分析が続ぎ、さらにそこにおける経済生活機構が検討される。その結論は商人間にギルドは存在せず、また政府による市場統制のための明確な組織もなかつたということである。しかしギルドは存在しなかつたとはいへ、社会の末端にはスーフィー教団に関係するある組織(Sayf)が存在していた。ところがこうした下層階級の組織によつて都市の組織化が行われたわけではなく、都市社会の秩序はマムルーク軍人とウラマールの提携によつて維持されていたのである。

第四章は貴族層を形成する商人とウラマールの分析である。商人はイスラム社会の上層を形成し、その商業活動はスルタンおよびマムルークと共同で行われた。カリミー商人は通商活動に従事するだけでなく、やがて政府に対する金融にもたずさわるようになり、国家と商人との結びつきは次第に強固になつていつた。そして十五世紀にはカリミー商人にか

わつて、スルタンに直屬する官吏身分の商人が登場したのである。ウラマーは宗教的なエリートではあつたが、土地所有による社会的富はマムルークの手中に握られていたため、彼らはマムルークの経済力に依存せざるを得なかつた。またウラマーは社会福祉のための手段、組織、あるいは民衆との結びつきを欠いていたので、イスラム共同体を防衛するためにはマムルーク体制が必要であると考えた。一方マムルークもその支配の正当性を保証する権威が必要であつた。このように都市共同体の統治秩序はウラマーとマムルークの提携によつて形成されていたのである。

第五章はこうして形成された政治権力に対して、都市の一般民衆がいかに対応していつたかを分析したものである。マムルーク体制下の都市では経済上の権利を握るマムルークは民衆との結びつきが弱く、一方民衆に近いウラマーや商人は政策に関与できないという矛盾が存在していた。したがつて中央政府の施策が社会の末端にまで及ぶことは稀であり、そのため民衆の不満が昂じて、しばしば暴動が発生していた。史料はこれらの民衆の集団を *shu'ra* と書き記している。この構成員は未婚の青年であり、その中には店主、大工あるいは仲介人が含まれていた。ズアルは街区への課税に対する抵抗のバック・ボーンとなつていたが、同時にマムルークは補助軍としてこのズアルを利用してことが注目される。

つまりズアルの抵抗は結局マムルークの支配を脅かすものではなく、彼らはマムルーク体制に反撥すると同時に、利害を共通にする側面をもつていたのである。

第六章はヨーロッパの都市と比較しながら結論を述べた終章である。それらを要約すれば、両者の最大の相違はイスラム都市には各階層間に相互浸透がみられるのに対して、ヨーロッパの都市ではそれぞれの階層は固定化していたことである。それ故マムルーク朝国家はルーズな組織体ではあつたが、マムルークは都市のウラマー、商人、民衆、そして最下層民と直接的な関係を結ぶことによつて、その支配体制を維持しえたのであつた。

以上が本書の概要である。豊富な内容が高度に圧縮されているために、これを要約するだけでも簡単なことではない。その上これに論評を加えることはなほだ困難であるが、次に敢えて本書の特徴および問題と思われる点を二、三指摘してみたい。

(三)

本書の問題設定が斬新であることは既に述べたが、その推論の仕方も実に精緻であると言える。これはそれぞれの章末に「結論」の一節をおいて、一章全体のまとめをし、同時に次章へのつながり方を論理的に整理していることによく示さ

れている。さらにそれに加えて、この精緻さは徹底した史料の検索によつても裏打ちされていることに注意しなければならぬ。読者が疑問点を注によつて史料に当るだけでも大変な努力を必要とする。本書の最大の成果はこれらの錯雑した史料を検討して、都市を中心とするマムルーク支配体制の特質を明らかにしたことであろう。しかも貴族層を形成するウラマー・商人、そして一般民衆、さらには最下層民の都市における存在の仕方を分析した後に、それらの階層の結節点としてマムルークを位置づけている点が重要である。本書をマムルーク朝の都市論としてだけではなく、国家論としても貴重であると考えざるを得ない。

しかし本書にも疑問点がないわけではない。その第一は、「はしがき」に明示されているように、考察の対象がマムルーク朝時代のシリアの都市、特にダマスカスとアレppoに限られていることである。もちろんカイロやアレキサンドリアについても言及されているが、それらの記述はあくまで補助的な位置を占めるにすぎない。しかしながら同じマムルーク朝治下にあるとはいえ、シリアとエジプトでは政治的・経済的条件はかなり異なっていたはずである。事実、本書でも街区 (District) の構成はアレppoとカイロでは異なり、またカイロのズアルはダマスカスのズアルより下層民で構成されていたことが指摘されている¹⁾。さらに第二章ではアミールの経

済力の一つの源泉として、ワクフ支配が取り上げられているが、マムルーク朝前半においてはエジプトのワクフはシリアほど重要な土地所有の形態ではなかつた。以上のことを考慮すれば、ダマスカス・アレppo両都市の分析から、マムルーク朝の都市を論じ、さらにそれを中世後期のイスラム都市論として一般化する場合には、その一般化のための条件を幾つか考慮する必要があると思われるのである。

第二は「都市と農村」の問題である。イクター制を基礎とするマムルーク朝国家においては、ビザンツ帝国の場合と同様に、軍人と都市との関係を考察するためには、軍人と農村との関係を分析することが不可欠である。そうした意味で第六章に、都市に居住するマムルークの経済的基盤は商業にあるのではなく、農村の土地支配であると指摘されているのは正しい。しかしながら軍人の土地支配、すなわちイクター制にかんする著者の理解の仕方には必ずしも賛成することは出来ない。例えば第一章では一三一三年から一三二四年にかけて軍隊への俸給支払いの組織化が行われたことが述べられ、第二章では Ci. Cahen, A. N. Polak, D. Ayalon, W. Popper の論文を引いて、マムルーク朝の軍人は直接土地を管理せず、文官行政に頼つていたことが述べられている²⁾。しかしイクターに対する国家の統制は極めて強かつたとはいへ、これを「俸給」と規定するのは無理であろう。も

ちろん Poindk のようにイクター制を中世ヨーロッパの封建制と比較して、簡単にこれを「封土」と規定するのは許されない。「封建制」といった概念を用いるためには、その前提としてイクター制を西アジアに固有な歴史的制度としてその実態を分析しておく必要があるからである。またマムルークと土地との結びつきについては一三一三年から一三二四年にかけて全国的に施行されたナースィル検地 (al-tawak al-masir) を機に、イクターからの官吏の引き揚げが行われている事実を無視することは出来ない。しかも灌漑設備の建設・整備のためにアミールはイクター内部の農民を自由に徴発できたことを示す記事が史料に散見する。それ故、軍人は都市に居住して、農村からの収益を国家から「俸給」として受領していたという理解の仕方では、マムルーク朝国家を正しく把握することは出来ないと思うのである。

第三はスルタン、ナースィルの評価に関してである。著者は第一章で十四世紀を繁栄と安泰の時代であるとし、都市の工業は栄え、貨幣は安定して、ナースィルによる経済の再編成が行われたと述べている。「軍隊への俸給支払いが組織化されたこと」については前述したような問題があるとしても、この指摘はおおむね正しいと思われる。しかしここでは重要な点が一つ見落されている。つまりナースィルの治世中にアイユーブ朝以来存続していた非マムルーク騎士団 (ajnad

al-halqa) は完全に没落し、それによつてマムルークの支配体制が確立したことである。それ以後都市や農村にマムルークの権力が次第に浸透していったことを考えると、マムルーク支配体制の確立期をどこにおくかは重要な問題であり、これにかんする言及がないのはいささか不満である。

以上三点にわたつて疑問と思われる点を述べてきたが、このような疑問が生まれるのも、本書が都市を扱いながら単なる都市論にとどまらず、マムルーク朝国家の本質にまで迫る問題を提起していたからであつた。しかも研究の前提として、自治共同体を基礎とする中世ヨーロッパ対東洋的専制主義のアジアという対立概念では中世イスラム都市は把握されないことを指摘し、具体的にそれを実証したことは今後の我々の研究にとつて貴重である。

なお巻末には補遺 A・B・C として、それぞれワクフ、ダマスクスの建造物、およびアレppoの建造物が、その設立の時期、場所、寄進者(建設者)、史料等に分類して表示されている。さらに補遺 D・E として、カーリミー商人および奴隸商人 (B. H. Hawat) の没年、姓名、称号、活躍地、宗教が要約されている。また同じく巻末には、五七一点に及ぶ写本、刊行史料、参考文献が列挙されているが、これだけ取り上げてみても本書の利用価値はすこぶる高いと言えよう。

(Lapidus, Ira Marvin: Muslim Cities in the Later

Middle Ages, xiv + 307, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1967.)

註

- (1) 本文九一～九二頁、一七三頁。
 (2) A. N. Poliak: Feudalism in Egypt, Syria, Palestine and the Lebanon, 1250-1900. (London, 1939). p. 36.
 al-Qalqashandi: Šuḥ al-A'shā, 14 vols. (Cairo, 1917 ~22), vol. III. p. 455.
 (3) 渡辺啓「『ムキムシ』社会経済史概説」(『宗教文化』昭和四十三年)一六二頁。
 (4) 本文一八八頁。
 (5) 本文一六頁。
 (6) Cl. Cahen: L'évolution de l'Iqta' de IX^e au XIII^e siècle, Annales. Économies, Sociétés, Civilizations, VIII. (1953).
 A. N. Poliak: Op. cit. p. 20~25
 D. Ayalon: The System of Payment in Mamluk military Society, JESHO, I (1958~58)
 W. Popper: Egypt and Syria under the Circassian Sultans, 1382-1468 A.D. University of California Publications in Semitic philology, vols. XV, XVI. (Berkeley, 1955, 1957).
 (7) 本文四六頁。
 (8) Maqrizi: al-Khitat. (Cairo, 1911) vol. I. p. 28
 Maqrizi: Kitāb al-Sulūk. (Qāhira, 1939~58) vol. II. p. 153~4.
 Ibn Taghribirdi: al-Nujm al-Zahira(Qāhira, 1929~56) vol. IX, p. 48
 (9) D. Ayalon: Studies on the Structure of the Mamluk Army, I-III, BSOAS (1953~54). "The Halqa".